



『お世話なんかじゃない』

栃木県立真岡北陵高等学校

「松田さん、洗髪上手ね」

学校で行った初めての入浴実習の際に、先生から言われました。私にとって入浴介助は、毎日家で行っている当たり前の行為です。「ありがとうございます」と応えつつ、心のなかでは「上手なんじゃない。ただ慣れているだけだ」と思っていました。私は何年も、母の身の回りの世話をしているからです。

母の世話を始めたのは、中学生になってからです。母の病状は日に日に悪化していき、できないことが増えていきました。私は、母が少しでも楽になるようにと、身の回りの世話をしました。しかし、母はあまり喜んでくれませんでした。私は、母にできることは何か、どうすれば母に喜んでもらえるか、常に悩んでいました。人に聞いたり、本を読んだりしましたが、私の望む答えは得られませんでした。

私の目を覚ましてくれたのは、歳の離れた弟です。弟は、いつも無邪気に母に話しかけたり、母の傍で遊んだりしていました。迷惑ではないかと心配しましたが、母の目は少し笑っているように見えました。わざわざ本で調べなくとも、答えはとても近くにあると気づきました。そして、私も弟と一緒に母に話しかけるようになりました。母は、返事のできないこともありますが、私たちの話を嬉しそうに聞いてくれました。

私は中学校を卒業し、福祉科のある高校に入学しました。介護の知識や技術を学び、それを家庭で活かせるようになりました。介護の理念を学んだ時、母が以前、私の世話を快く思わなかった理由に気がつきました。私は、母のできることまでやってしまっていたのです。それは、介護される人の自分らしく生きる権利を奪うものだったのだと感じました。方法や程度を考えながら「介護」をするようになってから、母はそれを受け入れてくれるようになりました。そう、今まで私は母の「世話」をしていたのです。私がしたいのは、すべきなのは、世話ではありません。介護なのです。

それから、母への介護のあり方について考えることが多くなりました。「私のしたことに対して母に喜んでもらう」という考えから「母が自分らしく生きられることが喜び」という考えに変わっていききました。

高校で福祉や介護について学び始めて、一年が経ちました。私は高校での学びを実生活でどう活用するかを考えながら授業を受けています。母が楽に眠れるように姿勢はどうか、母に恥ずかしい思いをさせないで排泄介助をするにはどうすればいいか、母の心を支えるために必要なものは何か。私にとって、授業に出てくる「要介護者」とは母のことでした。介護される側の姿を思い描いて知識や技術が身につけられるのは、母のおかげだと思っています。

私に、介護に関する気づきを与えてくれた母は、もうこの世にはいません。母は、私の介護者としての成長に気づいてくれていたでしょうか。母が「自分らしく」生きられるように支えることが、私にできたのでしょうか。母に答えを尋ねることは、もうできません。しかし、私はこれからどうしていけばよいか知っています。私は母と過ごした日々から学んだことを胸に、これから出会うたくさんの人の「自分らしさ」を支えていける介護福祉士になりたいです。それが、母への恩返しだと思うから。